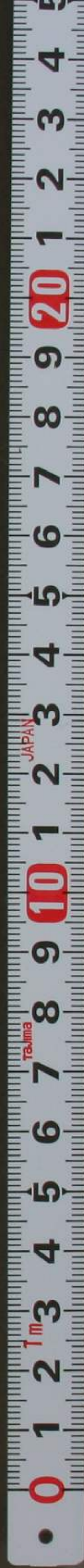


和文讀本

稻垣千願軒

卷二

ホ 2
 490
 2



490
卷九

和文讀本卷二

明治年月日

長寄贈

稻垣千穎

地理

伊勢國の大事は五本居宣長

伊勢國はかゝ國のうき一國と古語もいひて、
北のまてより南のまてまで、西の方は山々つら
なりつゞき、まこと小青垣をなせり、東の方は
入海まで、いせの海といふこれなりかくて、いづ
こもく、山と海との間、廣く平原より、北は桑名

東京
學校圖

利
小
利

より南は山田まで廿里あまりがほど山といふ
物ひとつも越ゆることなくテひとつゞきのくみば
らなりその間に廣き里々多うる中連山田安濃國原
津松坂桑名など殊に賑をくく大なる里なり
大りと京より江戸まで七國や國を經てゆく
間にかばうりの大里は近江の大津と駿河の府
とを如おきては有ることなりホカニハほ々の國々も思ひ
やらる除なほ件サキの里々につぎて四日市白子など
よき邑なりかくて此の國海の物山野の物すべ

てともくく暑寒も他國ふくらぶるにさ
しも甚くくらすたさむきは北の方へよ
るまゝ次第に寒く風はよく吹く國なり
國の賑はくきことは大御神の宮に詣づる
旅人たゆることなく殊に春秋のほどはいとく
あぎほくき事大りと天の下ふならびな
く土肥えて稻いとよ多なる物もほ穀
つ物も大りと皆よしかくて松坂は殊よき
里よて里の廣き事は山田につぎくれど富る

家おほく江戸小店といふ物をかまへおきて手
代といふものを多くあらせてあきなひせき
せてある^主の國のみ居て遊びを^高りうは
べはさ^世もあらでうちういたく豊お
ごりて渡^世るもべて此の里町もぢゆあて正
しく^世び家な^世る^世ろく^世どふ一尺二尺づ
出入^世てひと^世く^世びいとく^世とけな^世家
居はさ^世も^世い^世め^世から^世び^世されど内々のす
まひいとよ^世水^世のよき所とわろき所とあ

りてひと^世く^世び川水^世く^世あ^世潮もさ^世ね
む船通^世る^世山へは一里^世あ^世まり海への半里あ
まり^世諸國^世のた^世より^世よ^世こと^世ふ京江戸大坂の
多^世より^世よ^世諸國^世の人の入り来る國を^世ばい
づこ^世へも^世く^世便^世よ^世一人の心はよくもあらずお
ご^世ま^世そ^世お^世こと^世少^世人の^世り^世こ^世ち^世男も女もあな
う^世び^世た^世る^世こと^世さ^世ら^世よ^世なく^世よ^世ろ^世女は里の豊
ふ賑は^世き^世ま^世に^世姿^世よ^世を^世ひ^世よ^世ま^世べて^世を
さ^世く^世京^世お^世と^世れ^世る^世事^世な^世人の物いひは尾張

國より東の國々のなまり多きを伊勢は。お
 ほうとなまりあり。されど山城大和あどくハ
 何となく聲いやり。詞もいやり。き事多し。いそ
 ゆる吳服物。小間物部のたどひ。松坂のよき品を用
 みて。山田津などは。こよなく代物よし。されハ。
 商人の京より志いとも。松坂ハことみ物よし。上
 々の品あり。京のあき人常に來通ふなり。一時々
 のさやり物もなり。過さば。諸藝ハ所がらみ
 あり。せてハよきことともあり。びもろくの細工ハ

と上手あり。神社佛閣すべてよきは。す
 べて此の國は。他國の人おほく入り。こむ國な
 る故ふ。よらぬ物もおほく。盜あども多し。松
 坂ハ魚類野菜など。すべてゆきのなり。されど。
 魚の鯉鮒少く。野菜よいくわ。蓮根など少
 し。松坂のゆぬことは。町筋タビの正し。うらび志ど
 けなきと。船の通さぬとあり。

此文すべて
 紀記万葉等
 の古書に見
 える名を
 本よきと
 せしむは

其心くみ
紀の文意乃
さとりぐと
き所もある
べし

待乳山ハ大和國の堺にて紀の國の伊都郡なり
角田川はまのち川のことなるべし此川みたれも
とい葛城山のうちよりいで北隅田莊を流れ
て紀きの川みおつるあり紀の關ハ和泉國より紀
國の名草郡にこゆる雄山ミナありて南の麓に
る山口村に近し袖中抄を山の關守とあり
白鳥關ともいへるもトコロこは關の事なる處一名草
山は紀三井寺の山なりあぐらの濱ハ海士郡賀
田浦の南に方に田倉崎といふ所ある是ありと

五瀨命ハ神
武天皇の御
兄トまは

里人の言傳へるといふ吹上濱ハ若山の西南に
て若の浦の北あり雄のこなるとい今若山のうち
湊といふ所ハ小野町といふありて蛭子社あり
そこをのトコロといふあり五瀨命のコトあり
ま跡ありといへり小野町といふもトコロと雄
の町ありといへりこの蛭子社ハ吹上社といふ
をもたうらべ祭れり或説ふ吹上社は關戸村の矢
の宮なりともいへり雜賀浦ハ海士郡あり雜賀
莊にて廣き所あるその中にあはれ浦の西の

方に、雜賀崎といふところあり。これより雜賀
 浦ある處より浦のてらしまい。同郡濱中莊ほ、
 み村の八町ばかり海中に地の島といふあり。東
 西四町あり。南北八町ばかりの島あり。其島の
 三町ばかり西よ。やと島ありて。沖島といふ。東西
 五町に南北六町をのりあり。これ二の島を浦の
 てらしまといふ。をまての山は、在田郡山田莊ふ
 おしぐ村といふあり。これり。その村は、伊都郡の
 塚まで山のおくなり。白崎は、日高郡衣奈莊衣

奈浦の東南の方に、衣奈八幡といふあり。其社の
 縁起ふ。白崎といふことみえり。三穗の岩屋は、
 同郡三尾村の二十五町をのりひぐり。みちの海
 べふあり。岩屋の中ふ。石れ。觀音の像あり。熊野道
 のうち。日高川鹽屋浦のあよりより西の海べふ。長
 き松原ありて。和田松原といふ。これ岩屋は、其西
 のきはなり。野島。阿古根浦は、同郡志は屋浦の南
 ふ。野島。里あり。その海べをまこねの浦といひて。
 貝の多くよりて集る所なり。きりめ山は、同郡

ありね貝
 古より書
 不見る
 あり

熊野道のうみべまで。切目坂。切目浦。切目村ナあり。
山へ村より一里ばかり東北あり。村の北ふ。切目王
子社もあり。以て同郡なり。切目をまぎして。
次ふ岩代なり。西岩代。東岩代とて村あり。岩代王
子社海べふあり。千里濱ハ。岩代の南の邊より。み
なぐさまでの間。一里半ばかりの所をいふ。昔元弘元
年七月三日。大地震あり。紀の國千里濱二十よ町部が
布ど。忽陸となむるよし。大平記ふまむるせり。三
名部ハ。岩代の南あり。三名部村。みなべ浦ナあり。其

十町ばかり海中に島あり。こと鹿島なり。さて三
名部の南に堺浦といふワラありて。郡の堺あり。そこ
まで。日高郡。それより阿波の牟婁郡なり。磯
間浦ハ。たなべの王宿村の南。神子濱邊ふきみあり。
神島ハ。その一里をり海中よりありて。うしまとも
いへり。白良の濱は。湯崎。鉦山と。瀬戸との間ふ
ありて。里人の白濱といへり。此濱の真砂。遠く見
れば雪のごとし。神藏山は。新宮より二町ばかり
東南ふあり。社の説ふ。天照大神と。高倉下と。二神

高倉下命の
神靈の神劍
を奉り神武
天皇に奉ら
れしと云ふ
みそと云

を祭るといへり。石のばしを六間をのりのぼり
て。上ノ堂ありて。地藏の像をおけりといへり。そ
をを神倉権現といひて。其外ハ社ハ本ハ一。彼の高
倉下命の神劍を得たりと云ふ。こゝなりと
イフコト熊野村ハ。新宮ハ上熊野。中熊野。下熊野とて。三
村あり。三輪ヶ崎ハ。新宮より那智へゆく道の海べ
なり。新宮より一里半ばかりありて。けしきよき
所あり。佐野ハ。佐野村といふムラありて。こゝハ崎の
できたり。佐野岡ハ。村より七八町北ハあり。玉浦

ハ。那智山の下ある粉白浦といふ所あり。十町ばら
りにしみなと云ふ。ハ。なまこハと云ふは。玉
浦の南の海中にちりぐハ岩ハあり。は。そをいへる
あり。其外ハ島ハあり。熊野御崎ハ。那智山
の下濱宮よりゆく海べ乃道ハを。大邊地といふ。そハ
間ハ上野村といふムラあり。海中へ長くつきいでたる崎
みて。志ほ北御崎とも。鹽崎浦ともいへり。ツコミ
神社あり。少彦名命を祭る。此所の海は。のぼり
志ほくぐり潮とて。年を重ねて。片潮に流れて。

志ほの満干に拘らびいと早く流るれば海を渡
る船人のい^甚く怖る所なり。有馬村に新宮より
北に方へ伊勢の方へ五里ばかりゆきて森本と
いふ所の二十町ばかり南にあり。そこは産田神
社と花の窟あり。里人よと^訛なりて大般若
窟といふ此窟の山高^廿二十四五間。めぐり三町は
りあり。此窟は伊邪那美尊を葬奉れる所と
いふ。又或説はいざなま^{古ク}此尊を葬奉れる
所は産田神社あり。花の窟は火神ありとも

いへり。楯が崎は木本莊二木島といふ所より
一里むづり海中にあり。昔は此所伊勢と紀北
國の堺なり。と^{ナリ}里人いへり。錦の浦は長島莊
長島村の一里ばかりひぐりあり。此地昔は志摩
國なり。と^{ナリ}和^{イラ}上の件磯間浦よりこ^{以下}は皆
むろの郡なり」

動植

狗大なる蛇を咋殺す語 今昔物語

源隆國卿

今は昔陸奥國に住みける賤しき者あり家に
數の犬をうひて常に具して深山ふいて猪鹿
をとらする事を晝夜明暮の業とん。狗も主が
山へいぎばよろこびてあとさまにたちてゆき
猪鹿を昨殺しを役とん。うくする事を世の人狗
山といふある處にかる時ハ食物をもちて二三
日も山に止ること多し。或時此男例の如く狗
どもを具して山ふいて其夜の大きな木のう

つほふ入りて傍ふらえびら太刀をおき前ふ火
をとき狗どもいぬぐりに皆ふたりけり然る
ふ夜ふけて狗どもよくねいりたるは年ごろも
ぐれてかゝるとき狗あましの俄不起走りて主に
向ひておびとゞくほえければ主何をほゆ
るよやと異し思ひて見ぬぐらまにほゆ
き物なり。狗も猶吼之やまびして主ふ向ひて
をどろりうくして志きりよほゆ主驚きてほゆ
べき物もあまよくあるは獸の主をたぬまの

なすぶ。人もあき山中よて。我をくらまんと思ふ。あらん。切殺してすてばやとて。太刀を抜きて。威しけきども。少しも退かぬ。いやすしほえければ。うろ狭き穴にてくらひつゝまきは。あしうらんと思ひて。うろぼより外へ躍出でけり。其時に。これ狗らうぼの上北方ふ躍り。あがりて。物ふくひつきぬ。主。さては我をくらはんとして。ほえけるよ。いあらざやうらうと見らうらに。何とぞちるべ。おびたぞ。き物。狗と共ふ落ち

とらり。狗をほも放とせ。たぐくひつき居らり。主見らよ。長二丈餘ある蛇なり。主刀をぬきて。蛇を切殺して。狗を引離しけり。そのおの木比上に。大蛇のすみけるをたぐで。そのうろほふよりあしけるを。蛇の吞まむとておりにを見て。狗のほえけるなり。狗あくして。この蛇ふまうまないたまうらんや。この為には。ならびなき忠ある狗なりとて。具して家に歸す。と。語り傳へると也。

猿の鳥を使ふこと 古今著聞集

橘 成 季

文覺上人。高雄興隆のころ。見まをりけるよ。清瀧
川の上ふ。大なる猿兩三足。ありけあぐ。一の猿岩
の上ふあふのきふ。て動く。二足は。ちのき
て居たりけり。上人あや。思ひて。かききて見
けきは。鳥一兩飛び來て。このおこる猿のくとは
らよあ。志ば。そのりありて。猿のあ
をつ。けり。猿なほは。さらの。死す。さ

まのてあまを。鳥次第につま。上にのほり
て。眼をく。らんと忘ける時。猿鳥の足をを
りておき。あぐりよけり。その時。残の猿。二足出
來て。長きく。を持て。鳥の足ふ付けて。り。鳥
とび。らんと。さ。さ。さ。乃
川ふおりて。鳥をば水にたげ入れて。く。乃
さ。をとり。一足あり。いま二足は。川上よ
り魚を。けり。人の鶺鴒。のひ。を見て。魚
をとらせんと忘ける。や。不測

りくうける。鳥は水またげいせられれども。その益あくて死すけきは。猿どもはうちをて山へ入る。ふしぎな事。事まればあうり見たりしとき。まなはち上人くうける事たのし

鴨の類くさぐ

本居宣長

田中道磨が語をける鴨ふ大くこ四くさあり。第一大なる銭まがもといひ。次ふ大なるをひとり

といひ。次をあぢといひ。最も小きをたぐといふ。皆同ド鴨。たぐ形の大き小きによりて。名のうもるあり。あぢたのぶなど。万葉の歌あよ免り。又あいといふ。くさあり。ことし鴨のことひなごら。いさこのことあり。万葉七此歌。あきさことある。此物なりといへ

牛馬 犬徒然草

ト部兼好

人つく牛をば角をきり。人く馬をば耳を

廢牧律に凡馬牛及有觸。蹴踏咬人而記。號檢察不知法

者。宮。早。疏。ふ
者。産。人。者
者。兩。角。騎。人
者。辨。足。獨。人
者。截。兩。耳。

まうて。其の志るしとん。志るし。杖つけぎ。て人
を。や。ら。せ。ぬ。る。は。ぬ。の。と。の。なり。人。く。犬。を
ば。や。な。ふ。べ。く。び。是。皆。科。あり。律。比。い。ま。め
た。り。

無益ふ生類を殺せりきこと 徒然草

ト部 兼好

雅房大納言いざえりし。くよき入まで。大將あも
な。さ。ば。や。と。お。ぼ。し。ける。ころ。院の近習なる人
た。い。ま。あ。さ。や。し。き。事。を。見。侍。り。つ。と。申。され。け

き。で。何。事。ぞ。と。と。せ。給。ひ。ける。に。雅。房。卿。鷹。に。く
た。ん。と。て。い。ま。さ。る。犬。の。足。残。き。り。侍。り。つ。を。中。壇
の。穴。より。見。侍。り。つ。と。申。さ。ま。け。る。よ。う。と。ま。し。く
に。く。お。ぼ。し。め。し。て。日。ご。ろ。の。御。氣。色。も。こ。の
ひ。昇。進。も。ま。さ。ら。ざ。り。け。り。さ。ば。り。の。人。鷹
を。か。と。ま。し。り。ける。い。思。て。び。な。ま。さ。と。犬。の。足。跡
な。ま。き。事。なり。虚。言。の。不。便。な。れ。ど。も。く。る。事。を
ま。か。せ。た。ま。ひ。て。よ。く。ま。せ。給。ひ。ける。君。の。御。心。は。
いと。尊。き。こ。と。なり。大。く。こ。い。ける。物。を。殺。し。い

ためさうさうめて遊び樂まん人の畜生殘
 害のたぐひなり萬の鳥獸ちひさき虫までも
 心をとめてありさまを見るよ子を思ひ親を
 なるのくく夫婦を伴ひねくといひり欲お
 ほく身を愛し命ををしめることひとへり
 愚痴なる故に人よりもまきりて甚しくさふ
 くらみを取らん命を奪はんこといのでうい
 やうくさむすべて一切の有情を見て慈
 悲の心なるらん人倫あはれび

南殿の櫻のこと

古今著聞集

橘成季

南殿の櫻は村上の御時式部卿重明親王の家の
 櫻よほひ異なりとてうつらうとさける
 その後たびくの炎上にやけまかれた又あぬ
 木を引うゑくへらまゐる代々の帝この花を賞
 ぜさせ給ひて花の宴を行はる承久ふ右馬權頭
 頼茂朝臣うられ時まやけまやぐて造
 内裏あましよこれたね大監物源光行が家よ

南殿の櫻殿
 の左の方より

御溝の禁中の
流あり。吳竹
の臺に仁壽殿
の西あり

うつしうゑさるすし聞えてめしてうゑられ
とるイリとぞイリいづきの時の種あてかありけんおほ
つのをし。その櫻もいくちどなくして焼ぬきは
今のイあともさうもあし其あをいきことなん

之れ竹 かて竹 徒然草

ト部兼好

吳竹の葉ほそく薄かて竹の葉ひろし御溝お近
き淡かて竹仁壽殿の方によりて植らるゝとらん
くれ竹あり

むろの木

本居宣長

田中道磨が以へて万葉集の歌よよみたるむ
ろの木といふものハ今もいづこあも多くある物な
り。美濃の不破郡多藝郡あともひむろともひ
もろ杉ともいひ伊勢の員辨郡桑名郡あとりふ
て。さちむろ。まひむろといひ。尾張の羽栗郡あて
ねむむろとも。へほの木ともむろともいへり。まぐ
て山ふ多き木にて。地ふさふさ高くたると。二種

河うそ、ほふ方にい大木のなきを、立るうにむ
大あるも多し。柏子といふ木ふ似て、又杉ふも
似たり。二種ともふ實おほくなるまはなりんと
いへり。ま

まろすげといふ草 とねりこの木

本居宣長

世にかやつら草といふ草は、小さきゆりなる草の
田ふおひて、田夫のいへりといふ草あり。美濃國
よて、こまをまろすげといふ。三河國あり、まろすげ

といふ草あり。まろすげと管と歌ふよめる物に
て、あらどりと田中道磨いへり。
とねりこの木といふ木、木の色いと白く、葉ハ榎
の葉ふ似て、大木ふなる物をいふ。實ハ、しうくの
如き形あり。上の方は、葉のやうにひらなり。くだ
んの木、美濃國飯木村に多くありて、あづむら
あひなり。と、同人いへり。飯木村ハ、この人ハ故郷
なり。多藝郡なり。

家にあらまろすげ木草 徒然草

八重櫻ハ聖武
の御世に奈良
ふもあられた
る物のみ
えり

ト部兼好

家ノにありニた木ノハ松櫻ノ松ノは五葉ノもよし花ノはひ
とへあるガよしハ重櫻ノハ奈良ノ都ノふのこありけ
るを此頃ぞ世ノにおほくなり侍るなる吉野ノの花
左近ノのさくら皆ひとへふてこそあまハ重櫻ノハ異
様ノのまればなり心ノとこあらしく結ノちけたらる
むしもありあん遅櫻ノまことすさノ虫ノのつき
たるもむづのし梅ノは白ノきさうも紅梅ノひとへなる
がとく咲ノころも重ノすさる紅梅ノの小ほひめでこ

きも皆をのしおそき梅ノは櫻ノふさきあひて
おほえおとろげおされて枝ノに忘ほつきたる
心ノうしひとへなるがまづさきそありとる心
とくをらししそ京極ノ入道中納言ノはなほひと
へ梅ノをたあん軒ノちのくらゑらまらりける京極
の屋ノの南むきた今ノも二本侍るめり柳ノまことをか
し卯月ノむのりの若くでまづ万ノの花紅葉ノふ
まよさうてめでさきものなり橘ノ桂ノつぎま
木ノは物ノあり大ノなるよし草ノは山吹ノ藤ノりきり

まことちをてしこ池ハナトヨシは蓮ハナ秋の草はハナをぎハナをまき
 まちちりうはぎをみあへしあぢむりま志紫をみ
桔梗こまもかう菊地萱地まんだう菊龍黄菊もつ龍く龍朝葛
 顔地いづれもいと高く龍び龍さ龍やうなる垣葛ふ葛あ葛げ葛う
 らぬカよカしカこカのカ世カふカまれカあるカものカりカめカまカ
 たる名のきふらふ花も見なきぬたをカいとたぬ
 けーカのカもカめカづカくカひカうカぐカさカき
 めのカハカよカあカぬカ人のカわカてカ興カぞカるカものカなりカさカや
 うカのものカなカくカてカあカうカあカんカ

言行

高倉院天皇女童小御衣賜はせし御事
平家物語

不知作者或云信濃前司行長作

安元七年のころほひ御方たぐへの行幸のあま
 一ヲふヲさヲらヲでヲどヲにヲ雞人曉を唱ふる聲ハナ明王の眠
難を驚ハナひ程ハナあもハナなりハナくハナむハナいハナつハナもハナ御ねハナざハナめハナぐハナち
 みてつやく御寢もハナたハナうハナざハナうハナりハナたりハナ況んハナやハナさハナのハナるハナ

陰陽家の説
 不天一神のあ
 る方をあさう
 りといひてわ
 かゆるとす
 る方ふさくれ
 を他にいで
 一夜さけあ
 のちふゆく
 方さふくと
 い

霜夜のはげしき^{ヲリ}延喜の聖代國土の民ども
 が、つゝ小寒くるらん^ニとて夜のおと^ニに^テ御衣
 をぬぐせし^ニひける事など^ニおほしめ^ニ
 いで^ニこの帝徳の至らぬ事を^ニ御歎ありける
 深更に及て程遠く人のさげぶ聲^ニあけり^ニ供奉
 のひとぐはき^ニもつけらま^ニ主上^ニいさ^ニめ
 して只今叫ぶ^ニ何者ぞ^ニあま^ニ見て參れと仰
 せけま^ニば^ニう^ニぐ^ニあ^ニる^ニ殿上人^ニ上日の者に
 仰せ^ニ尋ぬま^ニば^ニ或^ニつ^ニに^ニあや^ニの^ニめ^ニの^ニら
^{宿直} ^{常直} ^女 ^童

女房ハ女官の
 事あり即ち
 きの女の童の
 主なり

はの長持のふ^ニさ^ニげ^ニたる^ニなく^ニあ^ニて^ニあり^ニけ
 る^ニい^ニう^ニあ^ニと^ニ問^ニへ^ニ主^ニの^ニ女^ニ房^ニの^ニ院^ニの^ニ御^ニ所^ニ小^ニ候^ニは
 せ給^ニあ^ニの^ニあ^ニほど^ニ漸^ニあ^ニく^ニた^ニれ^ニと^ニり^ニつ^ニる^ニま^ニぬ
 を持^ニて^ニ參^ニる^ニほ^ニど^ニよ^ニた^ニが^ニ今^ニ男^ニの^ニ二^ニ三^ニ人^ニあ^ニら^ニり^ニて
 き^ニそ^ニ奪^ニひ^ニと^ニり^ニて^ニま^ニかり^ニぬ^ニる^ニぞ^ニや^ニ今^ニは^ニ御^ニ装^ニ束^ニの
 來^ニあら^ニむ^ニこそ^ニ御^ニ所^ニあ^ニも^ニ候^ニを^ニせ^ニ給^ニま^ニぬ^ニま^ニさ^ニけ^ニの
 ぐ^ニく^ニ立^ニ宿^ニらせ^ニ給^ニふ^ニべき^ニ親^ニき^ニ御^ニ方^ニも^ニま^ニじ
 中^ニさ^ニび^ニこ^ニま^ニを^ニ思^ニひ^ニつ^ニく^ニる^ニふ^ニなく^ニあり^ニと^ニそ^ニい
 ひける^ニさ^ニく^ニら^ニ此^ニ女^ニの^ニ童^ニを^ニ具^ニく^ニ參^ニり^ニこ^ニれ^ニよ

し^ラ奏聞しつりけきば、主上ききてめしつて、あな
むざん、何者の志とぞとて、あふらんとき、龍顔よ
り御涙を流させたまふぞ、忝き堯の代の民は、堯
の心此をなほなるをもて心とする故、小皆をな
ほあり、今の代の民は、朕が心を以て心とするゆ
ゑに、か^新きまの朝ふありて罪を犯し、これ
つどのをばらふゆゑとぞ、仰せられける。さるに
ても、取らまはらん衣ハ何色ぞと仰せければ、志
くぐの色と奏^{三侍リ}ひ、建禮門院、其とまは、いまぞ中宮

あて渡らせたまふ時なり、其御方へさやうの色
志とする御衣や候ふと御たがねありたまは、先の
よりさるこのよ色いつくきか参りところを、くだ
んのめのまは、いまぞ給させける。いまぞ夜深^ハに
ま^然とさる目もぞあふとぞ、上日の者をあまこ
つけて、主の女房の局まで、おくらせましくける
ぞか^トけあき、さればあやの賤の男賤は
女ふいつくやで、たご此君、千秋萬歳の寶算を
ぞいのりける

行成卿實方中將に冠おとされ給ひ

こと 十訓抄

不知作者

大納言行成卿いよと殿上人よとおはしける時實
方中將いよなる憤うゆりけん殿上に参りあひ
ていふ事もなく行成の冠をうちおとしして小
庭ふなげまきけり行成すこもささぐぐび
しとめあり司をめして冠とりて参れとそ
冠して守刀よりうらうがいぬきとりて鬢ういつ

くろひて居直りていかなる事も候ふやらん
忽にうらほどの亂冠ふ預るべき事こそ覺え
侍らね其故を承りて後の事あ侍るべうらん
とことうはくいをきけり實方ハちりけ
ておげまき折しもはちとまより主上御覽
とて行成いのみとき者なりかくおとたき
心あらんとこそ思はさうしとてそのこび藏
人頭ひきうりけるに多くの人を越えそなされ
あけ至實方を中將をめして歌枕見て参り

歌枕とら古く
歌ふよみ

名所のこゝろ
なり

とて陸奥國ふたがうつうえされたるやうてかここ
てうせよけり

三條内大臣殿のこと 十訓抄

不知作者

三條内大臣殿
大相國守行
公の御子公致
公なり

三條内大臣御りとはまらうどまらうで来たう
けるに隣ふ公重少將の居らまらうけるがこ
殿さむらひと物をいひあうて大つがみあう
ちける傍の格子をいとおびたまらうちたうけ
まらう客人けしきおぼえけるふ人をあうたが

うのぞと問もせ給ひけまらう隣の少將のはら
あき事をどのめくらち候ふと申しけまらう
ちまらう客人に内へ入らせ給へあまらうもぞ
出くるとて我も引入り給ひけり又後ふらち
とけまらうかこくぞとばらうらちいひて
是いふとどのめも給まらう物語しておせ
し上臆はうくこまらうとみまらうあうら
たうらう一人なりと其客人のまらうひらるとなり
今の世まは不覺おわらうとやそし聞え

此殿いむげ不道心のねをけりける下加とや京
極大納言雅俊卿のいみづく腹あしくいつとイマフ
く齒をくひつめていうりてねまけりけるあは似
給てぞうける人を

公助父あうところこと

古今著聞集

橘 成 季

武則公助といふ隨身父子あうけり右近のうま
そののりゆきあく仕りころとて子公助をたれ
なる所賭まてらちけるをあげのく事もなう

とせければみな人そのふにげびてかくはうと
るぞといひくまはもーあげ候ひあは衰老の
父追コレラさんとせんあどよたをまなごー侍らむ
まはめて不便なりぬべくまべうくはごとく心の
ゆくほとらところなりと申ーけまば世の人
い甚どき孝子なりといひて世のねほえこれ
よりぞいできまにたる

小松内大臣殿賀茂祭見の事

十訓抄

不知作者

小松内府賀茂祭見んとて、車四五輛ぞくりあて、一
條の大路にいのでまへり、物見車は、みなよそをなら
べて、まきまもな、いふある車りのけられざり
んと、人々目をまき、たるに、ある便宜（祭條）の所なる
車ども、引出し、けるを見まひ、みな人もの
ぬ車ども、ありけり、うねて見所をとりにて、人を煩
はさど（下テ）の、このま、むな車を五輛たて、たをた
けるなり、其頃の内府のきりあてて、いふある車
ありとも、あつそひぐさく、こも有けぬ（成）とも、六條

の御息所のあるき、このめ、も、よ、なく、や、た、石、え
たまひけん、さ、ゆる、此、心、む、せ、な、さ、け、あ、の、

日野資朝卿のこと 徒章草

ト部兼好

為兼大納言入道め、とらまをて、武士ども、うち圍
みて、六波羅へ、おて、ゆき、り、ま、む、資朝卿、一條、つ、り、
うて、こ、ま、を、見、て、あ、な、う、や、ま、し、世、に、あ、ら、え
ね、ひ、い、で、く、こ、も、あ、ら、ま、ほ、し、ま、ま、と、そ、い、ま
れ、け、る、こ、れ、人、東、寺、の、門、に、雨、や、ど、り、せ、ら、ま、こ、り

為兼卿中納言
六年、時永三
六年、隠謀此
條家にめ、と
らまて、佐渡、
流され給ひ、
事あり

けるに^{ラリ}くそ^{不具人}ものどももの集り居たるが手もあし
もねぢ^捻め^曲ぐさうちりていづくも不具にこと
やうあるを見てとりぐにたぐひなきくせ者な^異
り尤愛もるに足れりとたもひて^{熟視}まひける
ほどよ^乃ぶ^汚て其興つきて見にくくいふせくたほえ
々ま^レバ只そな^レ不^レよめづら^レし^レぬまの^レあ^レ志の
^レと^レたもひて歸^レる^レの^レち^レこの間裁木を好みて
異やうに曲折あるを求めて目をよろこばしめつ
る^レい^レう^レ此^レか^レは^レを^レ愛^レも^レる^レなり^レら^レう^レと^レ興^レた^レく^レた^レほ

えけ^レを^レば^レ鉢^レに^レう^レあ^レられける木ども皆ほりすて
ら^レを^レあ^レり^レさ^レも^レあ^レり^レぬ^レべき^レこと^レなり^レ」
安養尼盗衣とらせし事 古今著聞集

橘 成 季

横川の惠心僧都の妹^才安養の尼^才れりとに強盗^才入り
あけり^才物^才ども^才を^才とり^才て^才いで^才あ^才けれ^才ば^才あ^才ま^才う^才人
の紙^才ぶ^才す^才ま^才とい^才ふ^才物^才ば^才う^才り^才を^才引^才き^才著^才て^才居^才ら^才ま^才
たりけるに^才姉^才なる^才尼^才の^才ま^才と^才よ^才小^才尼^才君^才と^才て^才あ^才り
ける^才が^才ば^才し^才ま^才ま^才あり^才て^才見^才え^才を^才ば^才小^才袖^才を^才ひ^才と^才あ

とらたど〜たりたるをとりて、こをぬま人とら
たど〜侍りけり、奉るとて、まちて来たり、多む、尼ら
へのいもれけるは、こもとりてのちは、この物とこそ
思ひつゝぬ、ぬの心ゆるまざらんものをば、いさき
ける、盗人のいまだとなくのよめい、とらどかち
てたそ〜すてとせ、まへとありけきば、門のう
たくば〜至いで、やとよびうへして、これをたとき
れにたり、〜うふ奉らんといひけきば、ぬまびと
ども立とまりて、志ば〜あんど、けしきありて、

あ〜く参りあけりとて、とりたる物どもをぬま
さそ〜返〜たきそ〜うりあけりとあん
松下禪尼明障子を繕ふこと 徒然草

ト部 兼好

相模守時頼の母ハ、松下禪尼とぞ申しける、守を
いれ申さる〜ことありたるふ、まうけたるありあ
やうのやぶきばうりをきりまて〜つはれ
けきをせうとの城介義景、その日のけいめいして
候ひける、給とて、なぶ〜男に〜せ候と

さやうの事に心得カレハリする者も候ふと申せカレハリされば
その男ハナ尼ニが細工ハナあよもまより侍らハナどハナとてなハナ一
間ハナづはハナれけるを義景ハナ皆ハナをハナはハナりハナく候ハナをハナんハナ選ハナ
れたハナやハナもハナ候ハナふハナべハナいハナまハナごハナらハナに候ハナあハナも見ハナ苦ハナく
とハナ重ハナねハナて申ハナされハナたハナまハナばハナ尼ハナも後ハナのハナさハナはハナくハナとは
りハナうハナへハナんハナとハナわハナめハナへハナどもハナくハナふハナむハナりハナいハナわハナざハナとハナりハナとハナて
あるハナべきハナなりハナ物ハナはハナやハナぶハナまハナくハナするハナ所ハナをハナりハナをハナ修理ハナ
て用ハナあるハナ事ハナぞハナとハナ若ハナきハナ人ハナにハナ見ハナなハナくハナをハナせハナてハナ心ハナづハナけ
むハナとハナめハナありハナとハナ申ハナされハナけハナるハナいとハナありハナぐハナとハナりハナけハナり

世を治むる道ハナ儉ハナ約ハナを本ハナとハナんハナ女性ハナなハナまハナくハナもハナ聖ハナ人ハナに
心ハナにかハナまハナりハナ下ハナ略

才藝

堀河院天皇の神樂を多近方に傳させ
給ひし事體源抄

豊原統秋

多ハナ近ハナ方ハナ資ハナ忠ハナあハナはハナ幼ハナくハナてハナわハナくれハナふハナけれハナばハナ神ハナ樂ハナのハナ道ハナ
ハ傳ハナへハナざハナりハナけるハナをハナ堀ハナ川ハナ院ハナ資ハナ忠ハナがハナ手ハナよりハナめハナでハナたハナく

傳へしめたりけまば、近方を尋召して、召人の中に、
この道絶たば口をうるべしとて、近方をやりて、近
衛の陣に候はせて、萩の戸の邊に近くめして、御自ぞ
教へ給ひける。但御口うつしに物をば、仰られれば、
師時卿して傳へ仰らまはば、彼の卿も聲ぞり
くりけれども、此此道の博士ありにたり。たの
づゝ師時候もどりける時、近方ぞらとひとら
ざる限、幾たびもうこひてぞ、まらせむとて、まし
ける。よくたりぬと思召しける時、物をば、仰られれば、

して、御歌をどめさせむとて、まらけり。三年
までよるひる近く候ひける。御口うつしに物をば
一度も仰らまざりけり。古體ありたり。又とひ物を
くりければ、たのづゝ師時卿なんどめ。たぐり紙
飯をいまして、たびたりければ、そまを僅にためつりてぞ。
二三日もまらけり。十六歳にたりて、始
めて内侍所の御神樂に、拍子とりたりけまは、めで
たくと、みくとより始て、ほめさせむとて、まらけり。
神樂の曲は、まらに絶えぬべりけることを、みくと

御口より給ひけるめでたうりける事なり」

後醍醐天皇の九宮の御歌 太平記

北小路玄慧等作

第九宮のいまど御幼稚ふれちしませばとて中
御門中納言宣明卿不預けられ都の内みそ御座
有ける此宮ことくハ八歳ふならせ給ひける常
の人よりも御心さまさかぐくればましけ
れば常へ主上既ふ人も通ぬ隱岐國とやらんよ
流さる給ふ上の我ひとり都の内に留りても何うせ

ん哀我をも君の御座あるなる國の何よりへ流し
遣せの責めてのよそながらも御行末をうけ
たまはらんうとくまきくどきさうち志を盡て御涙
さらにせきあへばさても君の押籠めらとて御座
ある白川の京近き所ときくに宣明など我を具足
して御所への参らぬぞと仰ありければ宣明卿涙
を押へて皇居程近き所あてごん候へ御供仕りて
参せん事仔細あるまどく候あが白川と申候ふ
都より數百里をへく下る道あて候ふさきハ能因

法師が都をば霞と共に出一のど秋風ぞふく白
川の關とよみて候ひ一歌にて道の遠き程人を
通さぬ關ありとはねがひめしき給へと申さ
れけきを宮御涙を押へさせ給ひて暫ハ仰出さる
る事もあやぐ有りてさそひ宣明我を具足して
參らんと思へる故にわやうに申そをのなり白
川の關とよみとり一下訓全く洛陽渭水の白川にハ
非ぞ此關奥州の名所なり近ごろ津守國夏は是
を本歌うそよとくううとに東路の關をゆ

うぬ白川も日數へぬれば秋風ぞふく又最勝寺のか
りの櫻枯れくうを裁え替るルナリとて藤原雅經朝
臣アなましくて見一コト名残の春ぞともニなとニあら川の
花の下蔭是皆名へ同くして所ハ替れる證歌あり
よ一や今ハ心にこめて言出さすと宣明を恨仰ら
まテ其後よりハうきたえ戀テとごに仰せられぞよ
ろづ物らき御氣色あて中門にたせ給へる折ふし
遠寺の晚鐘幽に聞えけまハ
つくぐと思暮して入相の鐘をきくにも君ぞ戀ツケテ

十二年云々は
陸奥の戦
宇治殿は
白頼通公な

下 情内に動きて。ことば外に顯れ御歌のをさく
しき哀に聞えしを。其比京中の僧俗男女。是哉
たごうぐく。扇にうき附て。是こそ八歳の宮の御歌
よとして。翫をぬ人へなうりけり」

源義家朝臣の江帥に物學びしこと 古今
著聞集

橘 成 季

義家朝臣十二年の合戦の後。宇治殿へまゐりて。戦
の間の物語しけるを。匡房卿よくききて。器量はか

江帥の大
匡房卿大宰
權帥みち
故に申し

しき武者なきとも。なほ軍の道をはたぬとひと
りことにてしけれけるを。義家の郎等ききて。けやけきこと
をのこす人うちと。おろひりりり。さるるに。江
帥出らまけるに。やぐて義家もいでけるに。郎等くる
ことと。そのまひつと。かろけれを。さめてや
あらんとひて。車にのりまける所へす。みよりて。會
釋せしれけり。ゆて弟子にありて。そまより常にま
で。學問せしれけり。その後。永保のうせんの時。金澤
の城をせめける。あひとつらの雁とびさるて。荻田の面に

孫子に馬亂者
伏也といふこと
見えたり

たりんと云々るが。俄に驚きそ。つら^行をこころて飛歸
りけるを。將軍あや^して。くづば^しをたさ^しと。先年
江帥のせ^し給へる事あり。夫軍野にふ^し時ハ飛雁
つら^{下玉}をやがる。この野ふ必敵^伏や^したるべ^しか^しめて
まをひ^しべきよ^し下知せらる^し手^しを分ちて三方を
やく時^し。あんのごとく三百餘騎をく^しねき^したり。多
兩陣亂合ひて。戦ふ^しと限^しを^しさ^しど^しも^しねて^しさ^し
りぬることあま^しば。將軍の軍うち^し乗り^して。武衡等が
軍^しあ^しま^しけ^しり。江帥の一言^しな^しる^しや^し。あ^しな^しら^し

西川は京の西
大井川の
一名あり

ま^しとぞい^しれ^しける

經信卿三舟に乗らま^しこと

十訓抄

不知作者

白河院西川に行幸の時。詩歌管絃の三の舟を浮べ
て。その^しち^しくのひと^しを^し分^しけて^しの^しせ^しれ^しる^しふ^し經^し信^し
卿^し遲^し參^しの間^しこと^しの^しほ^しく^し御^しけ^しき^しあ^しら^しる^しほ^しど^し
ふ^しと^しば^しり^しま^しされ^して^し參^しり^しけ^しる^しら^し。三事兼^しね^しる^し
人^しにて^し。ま^しは^しに^しひ^しま^しる^しま^しそ^し。や^しど^し舟^しに^しま^しま^しせ^し
候^しへ^しとい^しれ^したり^しける^し時^しにと^しり^して^しみ^しど^しり^しけ^しり^しか^し

いそん料に遅参せられたるふこそアツクさて管絃の舟にのりて詩歌を獻ぜしをたうけり。三の舟にのるとイブ是か

賴政二位の才能のこと十訓抄

不知作者

高倉院の御時御殿のうへに鷓のなきけるをアツクしきことありとて、いふいふをいふいふといふいふといふ有けるをある人賴政にいさせらるべきよし申しければバ然ナラんとして射めされて來りふけり。此の由を仰せらるるにカシ

こまうて宣旨をうけたまはりて、心中におりひコトひるモひるモにちひさき鳥なきは得モくモきを五月の空モ聞キふキのく雨さへクラふキていふキをありなり。我をぞに弓箭の冥加つきにクらりとねりひて、八幡大菩薩をねんと奉りて聲を尋ねて矢をはなつコトこトふるやうよねをえと身ニぶニよりて見るに、あやまニび中ニまニたり。天氣よりほトめてひとトく感歎いふばうりなり。後徳大寺左大臣、それとき中納言ヨめて祿をうけらヨまヨるかクなクんコト

ほととぎすび、名をも雲井に、あぐるくな。

頼政とりあへん。

弓はり月此射いふまのせて。

とつけとけりいみどりけりまうり出て後に。

昔養由雲外射雁、今頼政雨中得鷓。

とぞ感ぜらまゆる頼政墓目の外に、そや征矢を取りぐー

て持とけり後には人のとひまきば、まうり不覺ら

きとらば申一行ひとけり人を射射んぐとめなり。

とぞとくけり

道風朝臣の書のこと

古今著聞集

橘 成 季

延喜の聖主醍醐寺を御建立のとき道風朝臣に額書

きまわすもべきより仰らまへり額二枚を給せたり

一まゝい南大門一枚西門の料なり真草兩やうに

りききて奉るべきより勅定ありけきば仰にまごひて

兩様にりきそまわらせりけるを真に書たる南

大門のれうなるべきを草の字の額をそまの門より

とまたりたり道風をまみてあたま賢王とぞ

申一ける。そ此故ハ草のぐく。殊にかきすまゝにて
おろえけるが。叡慮にうまひて。くく日頃の議あらたま
りて。うまひけるまことに。かこき御はくひなる
べし。そまをほめ申ひなる。』

齊信卿拍子のこと 十訓抄

不知作者

後一條院の御時。清暑堂の御神樂に。公任卿拍子
とるべき。ありけるに。期小望とて。齊信卿。上臈
あて。上小居られたりけるよ。管絃者あて。あらね定

勢のこし拍
子をとり器
の料なり

めてよめ承伏せどと思ひて。笏をさしやりて。氣
色ばうりゆぐるよ。をせらるるよ。辭とることを
もなきて。やめて拍子をとりたる。思をばふへを
くたほえて。始終まこと。失なくめでこと。事をて
みつよう。こ此事は。御沙汰候ふぞ。いまをせけれ。ハ
くどの道にて候へば。かこのごとく。用意仕まりと
ぞ。答へらるる。いみじうりける。』

經家馬術のこと 古今著聞集

橘 成 季

武藏國の住人都築平太經家は高名の馬乗馬飼
なりけり。平家の郎等をけりせば、鎌倉右大將めし
どりて景時に預けらきにたり。それ時陸奥より大さ
くしてたけき悪馬を奉寄りたるをいふもの
者なりけり。ききとえある馬乗どもに面々にのせ
れけきども。ひとりもたまる者ありけり。幕下思
ふがらまれて。さるにて。此馬にのる者なきやま
んこと。口惜しき事なり。いふもべきと。景時にい
合せ給ひ。東八國に。今ハ心にきき者候も。但

召人經家ぞ候ふと申しければ。さらばめせとて。則
召出されぬ。白き水干に葛の袴をぞ著しけり。
幕下。うしろ悪馬あり。つらまつりてんや。とのま
ませければ。經家。こまりて。馬に必人ののらま
き器あり候へば。いよいよたけきも。人に從せぬ事や
候ふべきと申しければ。幕下。入興せられけり。さ
らば。つらまつりて。則馬を引出されぬ。誠に大
きく高く。いふを拂ひてはねまなり。烏帽
經家。水干の袖。袴のそは高く挟きて。烏帽

子ぐけしとて庭にたう立ちこるけしきまがゆし
とぞ見えける。わねて存知たりなるとやアサシ纏マシをぞ
のせとりける。そ此纏マシをぞげて。さし繩マシとらせさ
りけるを。少しも事ともせんはねちりりけるを。
さし繩マシにぞぐりて。たよりマシよりて乗りてけり。やぐて
おのりあぐりて出でけるを。少しはけしらせとらあど
どめて。のどくとゆめませ。幕下の前ふむけてたそ
こりたり。見る者マシめを驚マシさふといふ事マシなり。よく
のりせ。今はさやうにてこそあらぬとのこまをせ

ける時たりのぬマシ大きに感マシドたまひて勘當ゆるさま
て。既別當マシになされふけり。この經家マシが馬マシひける
ハ夜中はがうに起きそ。何マシああるらん。白マシき物を
一マシくをけはくり。手づのり持來て。必マシひマシをべて
よるまのり物をくはせと。夜明れマシはまどけ髪マシを
ゆめをて。馬マシの前マシまは。草マシ一把マシもたのん。さマシしくとは
うせそぞありける。幕下マシ富士川マシあひさその狩マシふ出
らまける時ハ。經家マシは。馬マシ七八マシひきに鞍マシたきて。手綱マシ
むまびて。人マシもつけび。うち放マシし。侍マシりたれば。經家マシが

馬の尻に随ひてゆきけり。さそ狩場にぞ。馬の疲ま
よるをうにひ。召に従ひてぞ。参らまげり。うやうに傳
へたる者なり。經家いふうひあく入海して死にけれ
ば。知るものあり。口をきことなり。

和文讀本卷二終

